

長崎県南島原市方言における従属節中のガ/ノ交替

言語学・応用言語学専門分野

2020（令和2）年入学

田川香里

2024（令和6）年1月提出

要旨

本論文では、肥筑方言に見られるガ系とノ系の主格交替（以下、ガ/ノ交替）について、長崎県南島原市方言を対象に調査を行い、その実態を明らかにすることを目的とする。これまでの研究では、主節内で起こるガ/ノ交替についての研究ばかりであり、従属節内で見られるガ/ノ交替に着目したものは少ない。そのため、本研究では、ガとノの使い分けの要因として、動作主性と節の違いに着目して調査を行った。

結果として、南の3分類でいうところのC類従属節で最もノの容認される領域が広がった。B類、D類従属節や連体節でも、主節よりもノの許容される領域が広がる結果となり、節の違いがノの容認度に影響することがわかった。

また、C類従属節以外では、動作主性に応じたガ系とノ系の分布が見られ、従属節内でも、動作主性が要因として働いていることがわかった。C類従属節では、クロス階層に沿わない分布が多く見られ、動作主性以外の要因が働いている可能性がある。

目次

1. はじめに.....	1
1.1. 本研究の目的	1
1.2. 対象とする言語	1
1.3. 対象とする言語現象	1
2. 先行研究.....	1
2.1. 九州方言のガ/ノ交替	1
2.1.1. 尊卑	2
2.1.2. 動作主性.....	2
2.1.3. 焦点	3
2.1.4. 接辞	3
2.2. 長崎方言・島原方言におけるガ/ノ交替.....	4
2.3. 先行研究の問題点	6
3. 調査	7
3.1. 調査方法.....	7
3.2. 従属節の設定	7
4. 調査結果.....	9
4.1. 主節の調査結果	9
4.2. 連体節の調査結果	14
4.3. B 類の調査結果	17
4.4. C 類の調査結果	22
4.5. D 類の調査結果	26
4.6. ノの領域の変化	29
5. 結論	29
6. おわりに.....	30
参考文献	31
グロス一覧.....	32

1. はじめに

1.1. 本研究の目的

本研究の目的は、長崎県南島原市で話される方言（以下、南島原市方言）における助詞ガとノの使い分けについて、動作主性と節の違いに着目して記述することである。南島原市方言を含む九州方言では、ガ系とノ系の主格交替（以下、ガ/ノ交替）があることが知られている。南島原市方言におけるガ/ノ交替の実態を明らかにすると共に、これまで研究の少なかつた副詞節内で見られるガ/ノ交替に焦点を当てて、調査を行っていく。

1.2. 対象とする言語

南島原市方言は、九州方言の一つである肥筑方言にあたる。長崎県の方言は、対馬方言を除き全てこの肥筑方言に分類される。南島原市方言が話されている長崎県南島原市は、長崎県南部の島原半島を構成する三つの市のうちの一つであり、人口は40,273人である（令和5年1月1日現在）。島原半島内でも南部に位置し、同じく島原半島を構成する島原市、雲仙市に隣接している。

1.3. 対象とする言語現象

日本語標準語では、能動文かつ主節の主語の場合、主語はガによって表示される。しかし、肥筑方言においては、主語マーカーとして、ガとノ（ン）の両方が存在する。

- (1) 花子 {ノ/ガ} 来た。 (花子が来た。) [猿渡 2019:54,(1b)]

しかし、これらは常に両方が使えるというわけではなく、特にノが使える場面には制限がある。

- (2) *花子ノ走った。 (花子が走った。) [猿渡 2019:55,(15)]

ガはほぼ全ての文で主格助詞として使用することができる一方、ノは、その使用条件に制限があり、例文(2)のような容認できない文が存在する。ガとノは、主語標示という機能をもつ点は同じであるが、自由に交替できるものではない。本研究では、このようなガとノの使い分けに関して、南島原市方言を対象に検証していく。

2. 先行研究

2.1. 九州方言のガ/ノ交替

これまでの研究では、尊卑、主語の動作主性、焦点、接辞の付与等が要因として考えられ

ている。

2.1.1. 尊卑

ガとノの使い分けに関して、従来多く述べられてきた説が、尊卑説である。尊卑説とは、主語が尊敬対象かやや見下げる対象かを要因として、ガ系とノ系が使い分けられるとする考え方であり、尊敬主語がノでマークされ、非尊敬主語がガでマークされる。秋山・吉岡（1991）は、熊本方言の格助詞ガとノに関して、古典と同様にノは尊敬の場合に使われ、ガはやや見下げる場合に使われると述べている。

2.1.2. 動作主性

肥筑方言で尊卑よりも要因として強く効いていると考えられているものが、主語の動作主性である。坂井（2018）は、これについて、有生性階層と他動性の階層を掛け合わせた「クロス階層」を用いて検証している。有生性階層は、(3)の通りである。

(3) 【一人称>>二人称>>三人称>>親族・固有>>人間普通>>動物>>無生物】

この階層の左ほど動作主として機能しやすいとしている。また、他動性の階層については、(4)の通りである。

(4) 【他動詞主語(A)>>意志自動詞主語(Sa)>>非意志自動詞主語(Sp)>>目的語(P)】

他動性の階層は、動作主性と連続的なものであり、動作主性に換言できる。有生性階層と同様に、階層の左ほど動作主性が高い。これらを掛け合わせたものがクロス階層である。表1は、坂井（2018）が、調査時に用いたクロス階層であり、この表の左上（すなわち一人称、他動詞主語）ほどガのみが許容され、右下（すなわち無生物名詞、非意志自動詞主語）ほどノが容認されるようになると報告している。

表 1 クロス階層

基本配列	代名詞		名詞			
	一人称	二人称	親族 固有	人間 普通	動物	無生物
A	G 系					
Sa						
Sp						N 系

これは、主節、中立叙述（非焦点、非主題）、非尊敬主語という条件下でのガとノの分布である。この結果から、ガ/ノ交替は、動作主性を反映したものであると主張している。坂井は、同研究で尊卑との関連も調べており、尊敬主語の場合、ノの領域が広がることがあることも報告している。しかし、これは尊敬表現で動作主性が下がるため、低動作主マーカーであるノ系を使えるようになると見え、尊卑によるノの容認度の変化は、動作主に基づくものであると述べている。

2.1.3. 焦点

加藤（2005）は、熊本方言ではノが唯一の主格であり、ガはフォーカスを表す標識であるとし、ガとノの使い分けに関して、(a)~(c)のことを報告している。

(a)とりたて・強調の場合には「ガ」を用いる。

- (5) 請求書だけ {が/*の} 届いたばい。 (請求書だけが届いたよ。)

[加藤 2005:30,(19)]

(b)ガ/ノの使い分けは尊卑よりも、とりたて・強調の方が要因として強く働く。

(c)他動詞文、非能格自動詞文（=意志自動詞文）、状態述語文（形容詞/形容動詞文、主格目的語文）の主語、多重主語構文の大主語には「ノ」を用いることができない。

- (6) 他動詞文：太郎 {が/*の} そん小説ばこーたばい。

(太郎がその小説を買った。)

[加藤 2005:31,(23)]

- (7) 状態述語文：太郎 {が/*の} 野球 {が/の} じょうずたい。

(太郎が野球が上手だ。)

[加藤 2005:31,(27a~d)]

また、吉村（2006）は、熊本八代方言において、主文、名詞を問わず、主語に用いる格助詞はノであるとし、大主語や焦点を表す場合は、ガを用い、大主語・焦点の名詞句のノが適用できないと述べている。

- (8) a. 東京ガ物価ノ高か (東京が物価が高い)

[吉村 2006:198,(8a)]

b. *東京ノ物価ガ高か (東京が物価が高い)

[吉村 2006:198,(8b)]

2.1.4. 接辞

坂井（2013）により、熊本方言において、敬辞やアスペクト辞を述語に付することでガ・ノの使用が変化することが報告されている。熊本方言における敬辞-asは、一人称、二人称以外の

名詞句が主語の場合に用いることができ、主語に対する敬意・信愛を表す。この敬辞が付与されることで、接辞がなかったときは許容されなかった意志自動詞まで許容されるようになると述べている。

- (9) 泥棒 {ガ/*ノ} 家さん入った。 (泥棒が家に入った。) [坂井 2013:76,(35)]

- (10) 木に {花子 (妹の名前) /お父さん/隣の太郎/田中先生/近所の子ども/先生/犬} {ガ/ノ} 登らした。
(木に花子 (妹の名前) /お父さん/隣の太郎/田中先生/近所の子ども/先生/犬) が登った。) [坂井 2013:80,(59)]

坂井 (2018) は、敬辞を付与することによってノの使用範囲が広がるのは、尊敬表現になることで、主語の動作主性が下げられるためであると述べている。

アスペクト辞は、基本的に進行相・継続相を表す-yor と継続相・完了相を表す-tor の 2 つである。これらの接辞を付与した場合、親族・固有名詞以下の階層において意志自動詞の主語表示にノが許容されるようになったと報告している。

- (11) あら、 {うちの妹/花子 (妹の名前) /お父さん/隣の太郎/田中先生/近所の子ども/先生/犬} {ガ/ノ} {走りよる/走つとる}。
(あら、 {うちの妹/花子 (妹の名前) /お父さん/隣の太郎/田中先生/近所の子ども/先生/犬} が走っている。) [坂井 2013:82,(63)]

坂井 (2018) では、アスペクト辞が付与された場合のノの拡大についての説明は見られなかったが、猿渡 (2019) でも、-yor、-tor の付与でノが容認されることになることが報告されている。猿渡は、テイル形 (-yor、-tor) や終助詞バイを付加すると、文全体がフォーカスとなるため、ノが認可されるようになると説明している。

2.2. 長崎方言・島原方言におけるガ/ノ交替

これまで、九州、特に肥筑方言で見られるガ/ノ交替についての先行研究を整理した。この節では、研究対象と特に関連が深い長崎方言、島原方言で見られるガ/ノ交替についての先行研究を整理する。

猿渡 (2019) によると、長崎方言は、他の方言と同様に、動詞の他動性がノの容認度に関わっており、熊本方言と近い格配列パターンを有する。長崎方言では、動詞の他動性が高いほど、ノの容認度が低くなる。

- (12) 花子の来た。 (主節・非対格動詞) (花子が来た。) [猿渡 2019:54,(1b)]
- (13) *花子の走った。 (非能格動詞) (花子が走った。) [猿渡 2019:55,(15)]
- (14) *花子のそん本ば買った。 (他動詞) (花子がその本を買った。) [猿渡 2019:56,(23b)]

また、猿渡は、焦点との関連について、長崎方言においてノが主格となる場合は、主語だけに焦点が当たることが回避された非焦点化であると述べている。従属節においても同様の非焦点化が人称や動詞のタイプに関わらず起きており、この非焦点化により、従属節内でノが容認されるようになるとしている。

島原方言に関しては、古瀬（1969）が以下のように述べている。

- (15) 当該方言では、主格および所有格の表現に[ga]・[no]([n])を混用する。[ga]は一人称・二人称・不定称の卑称表現に用いる。（中略）他との比較における主格には[no]([n])は用いない。必ず[ga]である。

他との比較における主格とは、例文(16)のようなものである。

- (16) ta:jorū mitfigajoka (お茶より、水がよい。) [古瀬 1969:3]

古瀬によると、島原方言では、主語が見下げる対象である場合、そして他との比較の文の主格にガが用いられる。

また、猿渡（2019）において、「長崎県内でも諫早市や島原市では、「～ス・～ラス」という敬辞を述語に付けることにより、属性主語が許される現象がある。」と述べられている。島原方言においても、例文(17)のように、敬辞を付与した場合ノが容認されるようになることがわかっている。

- (17) 田中さんの歩かした。 (田中さんが歩かれた。) [猿渡 2019:61,(iii)]

これらの先行研究によると、島原方言では主語の尊卑、比較の文であること、敬辞の有無がノの容認性に関わることがわかっている。

2.3. 先行研究の問題点

これまでガ/ノ交替に関わる要因を複数挙げたが、これらの研究の多くは、主節での検証ばかりであり、他の節内での検証はあまりなされていない。藤原（1991）は、例文(18)、(19)のように、従属節内においてもガ/ノ交替が起こることを報告しているが、十分な検証は行われていない。

- (18) マタ キノツイタラ、あとで言います。 (また気が付いたら、後で言います。) [藤原 1991:177]

- (19) ハラノ タッテデス ネー。 (腹がたってですねえ。) [藤原 1991:177]

藤原によると、例文(18)は副詞的修飾節、(19)は形容詞的修飾節であり、いずれの節内でも主格のマーカーとしてノが現れることができる。

また、同様に従属節での検証を行っている研究として Saruwatari (2016) がある。従属節内の動詞のタイプ別で検証したものが、例文(20)と(21)である。

- (20) 花子の来たとき、みんなは喜んだ。 (花子が来た時、みんなは喜んだ。) [Saruwatari 2016:54,(2.98a)]

- (21) 花子の踊ったとき、みんなは喜んだ。 (花子が踊った時、みんなは喜んだ。) [Saruwatari 2016:54,(2.98b)]

例文(20)は非対格動詞、(21)は非能格動詞であり、どちらの動詞でもノが許容されると報告している。

また、Saruwatari は、動詞のタイプ別検証に加え、複数の従属句を用いた従属節中のガ/ノ交替についても検証している。

- (22) 花子の踊るとき/まで、会場におけるね。 (花子が踊るとき/まで、会場にいるね。) [Saruwatari 2016:54,(2.99a)]

- (23) 花子の踊るけん、会場におけるね。 (花子が踊るから、会場にいるね。) [Saruwatari 2016:54,(2.99b)]

- (24) 花子の踊るなら、会場におけるね。 (花子が踊るなら、会場にいるね。) [Saruwatari 2016:54,(2.99c)]

Saruwatari は、例文(22)~(24)のように、述語の種類に関係なく、トキやケン、ナラにより節をつくる従属節では、ノが許容されるとしている。

しかし、Saruwatari は、動詞のタイプ別検証も従属節のタイプ別検証も十分な検証とはいえない。坂井（2018）では、主語の動作主性がガ/ノ交替の要因となっているとしているが、Saruwatari は、従属節内では、それらの主語や述語のタイプは関係しないと述べている。しかし、動詞や主語に関して網羅的な研究を行っておらず、従属節内では、述語の種類や主語の種類が関係しないと断言することはできない。また、Saruwatari は、従属節中では、中立叙述の解釈となるためノが許容されるようになるとしているが、実際にいかなる従属節においても、ノが許容されるようになるのか検証が行われていない。そのため、坂井のクロス階層を用いて、名詞や動詞と関連付けながら複数の従属節のタイプ別の検証が必要である。

3. 調査

3.1. 調査方法

長崎県南島原市出身の 70~80 代 3 名を対象に、対面によるインタビュー形式の調査を行った。以下が話者の詳細である。

A 氏 75 歳 女性 外住暦なし

B 氏 75 歳 女性 (15 歳~22 歳 愛知)

C 氏 81 歳 男性 (18 歳~29 歳 岡山・東京)

坂井（2018）のクロス階層を用いて、主節、副詞節、連体節におけるガ/ノ交替について調査した。本調査は、節タイプの違いと動作主性との関連に着目したものであるため、焦点や接辞の要因を排除して例文を設定した。また、坂井（2013）では、代名詞（私、あなた、彼等）も含め調査していたが、代名詞主語で文焦点の例文を作成することが困難であったため、親族名詞以下の階層で調査した。

3.2. 従属節の設定

従属節の分類に関しては、南（1974,1993）の従属句の 3 分類を主に参考とした。南は、従属句を構成要素の種類の範囲、その他のいくつかの特徴に基づいて 3 つに分類しており、逆接ではない「～ナガラ」を代表とする A 類、「～ノデ」を代表とする B 類、「～ガ」を代表とする C 類に分けられるとしている。

A 類：～ナガラ＜非逆接＞、～ツツ、～テ等

B類：～ノデ、～タラ、～ト、～ナラ、～ノニ、～バ等

C類：～ガ、～カラ、～ケレド（モ）、～シ等

この中で、A類が最も従属句の内部に生成可能な要素の種類の範囲が狭く、C類が最も広いとしている。このうちのA類は、従属節内に独自の主語をもつことができないため、調査対象から除外し、B類とC類からそれぞれ二つずつの従属句を選択して例文を作成し調査を行った。二つの従属句を選ぶ際には、以下の南（1974）が挙げているそれぞれの従属句の特徴を全て満たすか検証し自然な発話が予想されるものを用いて例文を作成した。

表2 従属句の分類

従属句の種類	A					B					C					C						
構成要素	ナ ガ ラ (複数)	ツ ク (複数)	テ ー (複数)	用 形 反 復	連 用 形 容 動 詞	テ ー (複数)	ト ー (複数)	ナ ガ ラ (複数)	連 用 形 容 動 詞	ノ ニ (複数)	バ ー (複数)	タ ー (複数)	ナ ラ (複数)	テ ー (複数)	ス ー シ (複数)	ナ イ ド (複数)	ガ ー (複数)	カ ー (複数)	ケ レ ド (複数)	シ ー (複数)	テ ー (複数)	用 形
述語的 的部分 以外の 要素	名詞+格助詞	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	状態副詞	+	+	+	+	(+)	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	程度副詞	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	A類従属句	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	主語（～がなど）	-	-	-	-	(+)	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	時の修飾語	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	場所の修飾語	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	ジツニ、トニカク、ヤハリの類	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	評価的意味の修飾語	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	B類従属句	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
述語的 的部分 の要素	提示のことば（～がなど）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	オソラク、タブン、マサカの類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	C類従属句	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	用言	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	使役形	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	受身形	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	受給の形	+	+	+	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	尊敬の形	+	+	+	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	丁寧の形	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	打ち消しの形	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	過去形	-	-	-	-	-	(-)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	用言+形式名詞	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	意志形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	推量形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

(+)は、ある要素がある句の中で存在可能であることを示す。(-)は、存在不可能。

(南 1974 128-129)

また、南が扱う従属節は、いわゆる副詞節であり、連体節や引用節などこの南の分類では、分類しがたい従属節がある。そのため、連体節と田窪（2010）らの設定したD類を調査例文に加えた。田窪は、接続助詞を以下の5つに分類している。

A：～て（様態）、ながら（同時動作）、つつ、ために（目的）、まま、よう（目的）等

B：～て（理由、時間）、れば、たら、から（行動の理由）、ために（理由）、ので（？）、よう（比況）等

C：から（判断の根拠）、ので、が、けれど、し、て（並列）等

D：と（引用）、という

また、野田（1996）は、引用節に分類されるものとして「～と」「～って」を挙げている。引用節とは、「～と言う」や「～と思う」などの「～と」に代表されるものである。これらを踏まえ、トとトイウの二つを用いて D 類従属節の例文を作成した。

4. 調査結果

今回の調査結果を分析する際に着目した点は 2 点ある。まず、①主節と比較した際、ノが容認可能とされる領域が主節と比較してどのように変化するかに注目する。これは、先行研究では明らかにされていなかった従属節におけるガ/ノ交替の特徴を明らかにするためである。次に、②動作主性に応じたガとノの分布が見られるかに着目する。これは、坂井（2018）によって明らかにされている、クロス階層の左上ほどガしか容認されず、右下ほどノが容認されるようになるという動作主性に従った分布を検証するためである。

表の表記方法は以下の通りである。なお、「？」は、話者はその表現を用いないが、他者が話していても問題ないと答えていたものであることを表す。

表 3 表の表記方法

判断	表の表記
ガのみ容認（ノは容認不可）	ga
ガもノも容認、どちらも同程度に自然	ga/no
ガもノも容認、ガを選好	ga>no
ガもノも容認、ノを選好	no>ga

4.1. 主節の調査結果

主節におけるガとノの分布は、以下のようになった。

表 4 主節 A 氏

主節	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga	ga	ga/n(o)	ga/no	ga/no	ga
Sa	ga	ga	ga/n(o)	ga/no	ga/no	no>ga
Sp	ga	ga	ga/n(o)	ga/no	no>ga	no/?ga

表 5 主節 B 氏

主節	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga	ga	ga	ga	no>ga	ga>no
Sa	ga	ga	ga	ga	no>ga	ga/no
Sp	ga	ga	no>ga	no>ga	no>ga	no>ga

表 6 主節 C 氏

主節	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga	ga	ga	ga	ga>no	ga>no
Sa	ga	ga	ga	ga	ga>no	no>ga
Sp	ga	ga	ga	ga	ga>no	no>ga

ノの容認可能範囲は話者ごとに異なるが、表の左上ほどガのみが容認され、右下にいくにつれノが容認されるようになるという坂井（2018）の結果と同様になった。以下、それぞれの階層について詳述する。まず親族名詞、有名詞に関しては、例文(25)~(27)のように、ノは容認できなかった。話者ごとの容認度の違いも動詞による違いも見られなかった。

(25) 親族名詞・他動詞

otooto{ga/*no}	garasuba	watta.
otooto={ga/*no}	garasu=ba	war-ta
弟=NOM	ガラス=ACC	割る-PST
（「なんでそんなに怒っているの？」という質問に対して）「弟が窓（ガラス）を割った。」		

(26) 親族名詞・意志自動詞

otooto{ga/*no}	saaki	modotta.
otooto={ga/*no}	saki	modor-ta
弟=NOM	先	戻る-PST
（「なんでそんなに怒っているの？」という質問に対して）「弟が先に帰った。」		

(27) 親族名詞・非意志自動詞

*otooto{ga/*no}* *uttaoreta.*
*otooto={ga/*no}* *uti-taore-ta*
弟=NOM PFX-倒れる-PST

(「なんで慌ててるの？」という質問に対して) 「弟が倒れた。」

普通名詞では、話者間でノの容認度に違いがあった。例文(28)、(29)は、同じ例文であるが、話者 A はノが容認でき(28)、話者 B と C はノが容認不可であった(29)。A 氏は、例文(28)、(30)のように動詞の他動性に関わらず、ノが容認できた。しかし、B 氏と C 氏は、他動詞主語の場合、ガしか容認できなかった(29)。B 氏は、他動詞主語の場合はノが容認できなかったが(29)、他動性の低い非意志自動詞ではノが容認できた(31)。C 氏は、例文(32)のように、他動性の低い非意志自動詞でもノが容認できず、普通名詞では、動詞に関わらずガしか容認できないという結果になった。

(28) 普通名詞（尊敬）・他動詞 A 氏

sensei{ga/no} *madoba* *warasita.*
sensei={ga/no} *mado=ba* *war-rass-ta*
先生=NOM 窓=ACC 割る-RSP-PST

(「大きな音がしたけど、どうしたの？」という質問に対して) 「先生が窓を割った。」

(29) 普通名詞（尊敬）・他動詞 B 氏

*sensei{ga/*no}* *madoba* *warasita.*
*sensei={ga/*no}* *mado=ba* *war-rass-ta*
先生=NOM 窓=ACC 割る-RSP-PST

(「大きな音がしたけど、どうしたの？」という質問に対して) 「先生が窓を割った。」

(30) 普通名詞（尊敬）・非意志自動詞 A 氏

sensei{ga/no} *taorerasita.*
sensei={ga/no} *taore-rass-ta*
先生=NOM 倒れる-RSP-PST

(「そんなに慌ててどうしたの？」という質問に対して) 「先生が倒れた。」

- (31) 普通名詞（尊敬）・非意志自動詞 B 氏
- | | |
|-----------------------|----------------------|
| <i>sensei{ga/no}</i> | <i>taorerasita.</i> |
| <i>sensei={ga/no}</i> | <i>taore-rass-ta</i> |
| 先生=NOM | 倒れる-RSP-PST |
- （「そんなに慌ててどうしたの？」という質問に対して）「先生が倒れた。」

- (32) 普通名詞（尊敬）・非意志自動詞 C 氏
- | | |
|------------------------|-----------------|
| <i>sensei{ga/*no}</i> | <i>taoreta.</i> |
| <i>sensei={ga/*no}</i> | <i>taore-ta</i> |
| 先生=NOM | 倒れる-PST |
- （「そんなに慌ててどうしたの？」という質問に対して）「先生が倒れた。」

名詞句階層の動物名詞以下では、動詞の他動性、話者の個人差に関わらずほぼすべての名詞でノが容認された(33)(34)(35)。

- (33) 動物名詞・他動詞
- | | | |
|-------------------|----------------|----------------|
| <i>in{ga/no}</i> | <i>madoba</i> | <i>watta.</i> |
| <i>in={ga/no}</i> | <i>mado=ba</i> | <i>war-ta.</i> |
| 犬=NOM | 窓=ACC | 割る-PST |
- （「大きな音がしたけど、どうしたの？」という質問に対して）「犬が窓を割った。」

- (34) 動物名詞・意志自動詞
- | | |
|-------------------|----------------|
| <i>in{ga/no}</i> | <i>oyoida.</i> |
| <i>in={ga/no}</i> | <i>oyog-ta</i> |
| 犬=NOM | 泳ぐ-PST |
- （「何があったの？」という質問に対して）「犬が泳いだ。」

- (35) 動物名詞・非意志自動詞
- | | |
|-------------------|-----------------|
| <i>in{ga/no}</i> | <i>taoreta.</i> |
| <i>in={ga/no}</i> | <i>taore-ta</i> |
| 犬=NOM | 倒れる-PST |
- （「なんで慌てるの？」という質問に対して）「犬が倒れた。」

坂井（2018）の調査した熊本市方言では、いずれの名詞句階層においても、他動詞文では、

ガしか許容されなかつたが、南島原市方言では、動物名詞主語の他動詞文では例文(33)のようにノも許容されていた。無生物名詞でも、話者 A を除き、他動性に関わらずノが容認された(36)(37)(38)。

(36) 無生物名詞・他動詞

<i>tunami{ga/no}</i>	<i>matiba</i>	<i>nomikonde</i>	<i>simota.</i>
<i>tunami={ga/no}</i>	<i>mati=ba</i>	<i>nomikom-de</i>	<i>simaw-ta</i>
津波=NOM	町=ACC	飲み込む-SEQ	しまう-PST

(「どうしたの？」という質問に対して) 「津波が町を飲み込んでしまった。」

(37) 無生物名詞・意志自動詞

<i>iwa{ga/no}</i>	<i>korogattekita.</i>
<i>iwa={ga/no}</i>	<i>korogar-te=ki-ta</i>
岩=NOM	転がる-SEQ-来る-PST

(「大きな音がしたけど、どうしたの？」という質問に対して) 「岩が転がってきた。」

(38) 無生物名詞・非意志自動詞

<i>kanban{ga/no}</i>	<i>taoreta.</i>
<i>kanban={ga/no}</i>	<i>taore-ta</i>
看板=NOM	倒れる-PST

(「大きな音がしたけど、どうしたの？」という質問に対して) 「看板が倒れた。」

これまで見たように、主節では、クロス階層の左上ほどガのみが許容され、右下にいくにつれノが許容されるという動作主性に応じたガ系とノ系の分布が見られた。

しかし、このような動作主性に応じた分布から外れるものもあった。無生物名詞で、例文(39)のように動作主性が低いにも関わらず、ノが容認されなかつたり、ガの方が選好されたりするものがあった。

(39) 無生物名詞・他動詞

<i>tunami{ga/*no}</i>	<i>matiba</i>	<i>nomikonde</i>	<i>simota.</i>
<i>tunami={ga/*no}</i>	<i>mati=ba</i>	<i>nomikom-de</i>	<i>simaw-ta</i>
津波=NOM	町=ACC	飲み込む-SEQ	しまう-PST

(「何があったの？」という質問に対して) 「津波が町を飲み込んでしまった。」

このような分布から外れる例はわずかであったため、主節では動作主性がガ系とノ系の使い分けに反映されているといえる。

4.2. 連体節の調査結果

連体節の調査結果は以下の通りである。連体節では、以下のように主節で用いた例文に「ことがある」を用いて作成した。例文(40a)が主節で用いた例文、(40b)が「ことがある」を付加して連体節とした文である。

- (40) a. 弟が窓を割った。
 b. 弟が窓を割ったことがある。

まず A 氏の結果を示す。

表 7 連体節 A 氏

連体節	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga	ga	ga	ga>no	no>ga	no>ga
Sa	ga	ga	ga>no	ga>no	no>ga	n(o)>ga
Sp	ga	ga	ga>no	ga/no	no>ga	no>ga

ノが容認される範囲は主節と同じであった。また、動作主性や他動性が低くなるにつれ、ノが容認、選好されるようになるというクロス階層に沿った分布となり、例外も見られなかった。例文(41)、(42)、(43)のように、同じ動詞であっても、親族、固有名詞ではガのみが容認、人間普通名詞ではガが選好、動物名詞以下ではノが選好されており、名詞句階層に沿ってガとノの容認度や選好性が変化している。

(41) 連体節 親族名詞・意志自動詞

otooto{ga/*no}	sakini	modottakoton	aru.
otooto={ga/*no}	saki=ni	modor-ta=koto=n	ar-ru
弟=NOM	先=DAT	戻る-PST=こと=NOM	ある-NPST
「弟が先に帰ったことがある。」			

(42) 連体節 普通名詞（尊敬）・意志自動詞

<i>sensei{ga/no}</i>	<i>sakini</i>	<i>kaerasitakoton</i>	<i>aru.</i>
<i>sensei={ga/no}</i>	<i>saki=ni</i>	<i>kaer-rass-ta=koto=n</i>	<i>ar-ru</i>
先生=NOM	先=DAT	帰る-RSP-PST=こと=NOM	ある-NPST
「先生が先に帰ったことがある。」			

(43) 連体節 動物名詞・意志自動詞

<i>in{ga/no}</i>	<i>oyoidakoton</i>	<i>aru.</i>
<i>in={ga/no}</i>	<i>oyog-i-ta=koto=n</i>	<i>ar-ru</i>
犬=NOM	泳ぐ-THM-PST=こと=NOM	ある-NPST
「犬が泳いだことがある。」		

次に、B 氏の結果を示す。

表 8 連体節 B 氏

連体節	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga>no	ga>no	ga>no	ga>no	ga/no	ga/no
Sa	ga>no	ga>no	ga>no	ga/no	ga>no	ga/no
Sp	no>ga	no>ga	ga>no	ga/no	ga>no	ga/no

主節と異なり、ノが全ての領域で容認されており、ノの使える範囲が大きく広がっている。概ね動作主性に応じた分布となっているが、動作主性の高い親族、固有名詞階層、非意志自動詞主語文でノが選好されており、階層に沿わないものが見られた。

(44) 連体節 親族名詞・非意志自動詞

<i>otooto{ga/no}</i>	<i>taoretakonno</i>	<i>atto.</i>
<i>otooto={ga/no}</i>	<i>taore-ta=kotu=no</i>	<i>ar-ru=to</i>
弟=NOM	倒れる-PST=こと=NOM	ある-NPST=SFP
「弟が倒れたことがある。」		

また、動物名詞階層の自動詞文で、ガの選好度が高くなっている(45)。これも、クロス階層に沿わない結果である。

(45) 連体節 動物名詞・意志自動詞

<i>in{ga/no}</i>	<i>oyoidakonno</i>	<i>attodoo.</i>
<i>in={ga/no}</i>	<i>oyog-ta=kotu=no</i>	<i>ar-ru=to=do</i>
犬=NOM	泳ぐ-PST=こと=NOM	ある-NPST=SFP=SFP
「犬が泳いだことがあるんだよ。」		

次に、C 氏の結果を示す。

表 9 連体節 C 氏

連体節	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga/?no	ga	ga	ga>no	ga	ga>no
Sa	ga	ga	ga	ga	ga	ga/no
Sp	ga	ga	ga	ga>no	ga>no	ga>no

ノが容認される領域が主節より若干広がった。主節では容認されなかつた親族名詞階層や人間普通名詞階層でノが容認されるようになっている。

また、動作主性に応じたガとノの分布から外れた結果が主節の場合より多く見られた。例文(46)のように、最もノが容認されにくい親族名詞・他動詞文でノが容認できる結果となった。

(46) 連体節 親族名詞・他動詞

<i>otooto{ga/?no}</i>	<i>garasiba</i>	<i>utiwattakoton</i>	<i>aru.</i>
<i>otooto={ga/?no}</i>	<i>garasi=ba</i>	<i>uti-war-ta=koto=n</i>	<i>ar-ru</i>
弟=NOM	ガラス=ACC	PFX-割る-PST=こと=NOM	ある-NPST
「弟が窓（ガラス）を割ったことがある。」			

また、動物名詞階層の他動詞文、意志自動詞文でノが容認されない結果となった。より動作主性の高い人間普通名詞（尊敬）階層では、ノが容認されており、動作主性に応じた分布から外れている。

(47) 連体節 動物名詞・他動詞

<i>in{ga/*no}</i>	<i>madoba</i>	<i>utiwattottakotiga</i>
<i>in={ga/*no}</i>	<i>mado=ba</i>	<i>uti-war-te=or-ta=kotu=ga</i>
犬=NOM	窓=ACC	PFX-割る-SEQ=PF-PST=こと=NOM

aru.

ar-ru

ある-NPST

「犬が窓を割ったことがある。」

(48) 連体節 人間普通名詞（尊敬）・他動詞

<i>sensei{ga/no}</i>	<i>madoba</i>	<i>utiwattakoton</i>	<i>aru.</i>
<i>sensei={ga/no}</i>	<i>mado=ba</i>	<i>uti-war-ta=koto=n</i>	ar-ru
先生=NOM	窓=ACC	PFX-割る-PST=こと=NOM	ある-NPST

連体節内では、主節と同程度の容認範囲、あるいは広がる結果となった。また、主節と比べると連体節内の方が、動作主性に応じた分布から外れるものが多く見られた。

4.3. B 類の調査結果

B 類の調査結果は以下の通りである。本調査では、B 類の特徴を満たすタラとテモの二つの従属句を用いて、調査を行った。

まず A 氏の結果を示す。

表 10 B 類 (タラ) A 氏

B 類 タラ	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga	ga	ga	ga	no>ga	no>ga
Sa	ga	ga	ga>no	ga/no	ga>no	no>ga
Sp	ga	ga/?no	ga/no	ga/no	no>ga	no>ga

表 11 B 類 (テモ) A 氏

B 類 テモ	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga	ga	ga>?no	ga>no	ga>no	no>ga
Sa	ga	ga	ga>no	no>ga	ga/no	no>ga
Sp	ga>no	ga>no	ga>no	ga>no	ga/no	no>ga

主節とタラを用いた従属節では、ノの容認可能範囲に差が見られなかったが、テモを用いた従属節では、ノの容認される範囲が広がった。テモを用いた従属節中では、親族、固有名詞の非意志自動詞文でもノが容認されており、ノの領域が広がっているといえる(49)。

(49) B 類 (テモ) 親族名詞・非意志自動詞

otooto{ga/no}	taoretan,
otooto={ga/no}	taore-ten
弟=NOM	倒れる-CONC
daremo	kizukanzatta.
dare=mo	kizuk-a-n=zyar-ta
誰=PART	気付く-THM-NEG=COP-PST
「弟が倒れても、誰も気づかなかった。」	

動作主性に応じたガとノの分布から外れるものとして、例文(50)と(51)があった。例文(51)は、C 類のケレドに対応する batten を用いて発話されたため、ノが選好された可能性が考えられる。

(50) B 類 (タラ) 動物名詞・意志自動詞

<i>in{ga/no}</i>	<i>oyoidagittoka</i>	<i>bikkurisuzzyaro.</i>
<i>in={ga/no}</i>	<i>oyog-i-ta=gittoka</i>	<i>bikkuri=sur=zyaro</i>
犬=NOM	泳ぐ-THM-PST=CND	びっくり=する=INF
「犬が泳いだら、(みんな) 驚くだろう。」		

(51) B 類 (テモ) 人間普通名詞(尊敬)・意志自動詞

<i>sensei{ga/no}</i>	<i>hasirasitabatten,</i>
<i>sensei={ga/no}</i>	<i>hasir-rass-ta=batten</i>
先生=NOM	走る-RSP-PST=ADVRS
「先生が走っても、生徒には追い付かなかった。」	

次に、B 氏の結果を示す。

表 12 B 類 (タラ) B 氏

B 類 タラ	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga	ga	ga/?no	ga/no	ga/no	ga>no
Sa	ga/?no	ga/?no	ga/no	no>ga	ga/no	no>ga
Sp	ga>no	ga>no	ga/no	ga/no	no>ga	ga/no

表 13 B 類 (テモ) B 氏

B 類 テモ	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga	ga	ga>no	ga>no	ga/no	ga>no
Sa	ga	ga	ga>no	ga>no	ga/no	ga/no
Sp	ga>no	ga>no	ga>no	no>ga	ga/no	ga/no

主節に比べ、ノの容認される範囲が広くなっている。主節ではガしか容認されなかつた人間普通名詞でノが容認されるようになった。さらに、親族名詞、有名詞といった動作主性の高い階層でも、非意志自動詞文ではノが容認される結果となった(52)(53)。

(52) B 類 (タラ) 親族名詞・非意志自動詞

otooto{ga/no}	taoretara,
otooto={ga/no}	taore-tara
弟=NOM	倒れる-CND
daiga	sewaba
dai=ga	sewa=ba
誰=NOM	世話=ACC
	する-OBL=INF
「弟が倒れたら、誰が世話をしなければいけないだろう。」	

(53) B 類 (テモ) 親族名詞・非意志自動詞

otooto{ga/no}	taoretaton,
otooto={ga/no}	taore-ta=ton
弟=NOM	倒れる-PST=ADVRS
daaren	siranyatta.
dare=n	sir-a-n=zyar-ta
誰=PART	知る-THM-NEG=COP-PST
「弟が倒れても、誰も気づかなかつた。」	

タラ節の無生物名詞・他動詞文、人間普通名詞（尊敬）・意志自動詞文、無生物名詞・非意志自動詞文、テモ節の動物名詞・他動詞文、普通名詞（尊敬）・非意志自動詞文が動作主性に応じたガとノの分布から外れていた。いずれもノが容認されるという点では、階層に沿って

いるといえるが、選好性の点で階層に沿っていない。

次に、C 氏の結果を示す。

表 14 B 類 (タラ) C 氏

B 類 タラ	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga	ga	ga	ga	ga>no	ga>no
Sa	ga	ga	ga/?no	ga/no	ga/?no	ga>no
Sp	ga	ga	ga	ga/no	ga/no	ga/no

表 15 B 類 (テモ) C 氏

B 類 テモ	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga	ga	ga	ga	ga>no	ga>no
Sa	ga	ga	ga	ga>no	ga>no	ga>no
Sp	ga	ga	ga	ga	ga>no	ga>no

A 氏、B 氏と異なり、親族名詞、固有名詞ではノは容認不可であったが、主節と比較するとノの容認される範囲は広がっている。特に、人間普通名詞は、主節では全てノは容認不可であったのに対し、B 類の従属節では容認されるようになっている(54)(55)。

(54) B 類 (タラ) 普通名詞 (尊敬) • 意志自動詞

sensei{ga/no}	modottanara,	ikodai.
sensei={ga/no}	modor-ta=nara	ik-o=dai
先生=NOM	戻る-PST=CND	行く-HOR=SFP
「先生が帰ったら、出かけよう。」		

(55) B 類 (テモ) 普通名詞 (尊敬) ・ 意志自動詞

sensei{ga/no} *hasittemo*,

sensei={ga/no} *hasir=temo*

先生=NOM 走る=CONC

seitoniwa *kanawanzetta.*

seito=ni=wa *kanaw-a-n=zyar-ta*

生徒=DAT=TOP 敵う-THM-NEG=COP-PST

「先生が走っても、生徒には追い付かなかった。」

B 類従属節では、話者によって広がりに程度の差があるものの、主節よりもノの範囲が少し広がっていた。また、動作主性に応じた分布であったが、主節と比べると、分布から外れる例が多く見られた。しかし、18 例文中、2~3 程度であり、動作主性を反映した分布であると見做せる。

4.4. C 類の調査結果

C 類の調査結果は以下の通りである。本調査では、C 類の特徴を全て満たすカラとケレドの二つの従属句を用いて、調査を行った。

まず A 氏の結果を示す。

表 16 C 類 (カラ) A 氏

C 類 カラ	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	n(o)>ga	ga>no	ga>no	ga/no	no>ga	ga>no
Sa	ga>no	ga>no	ga>no	ga/no	no>ga	n(o)>ga
Sp	ga>no	ga>no	ga>no	ga/no	no>ga	no>ga

表 17 C 類 (ケレド) A 氏

C 類 ケレド	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	n(o)>ga	ga>no	ga>no	ga/no	no>ga	ga>no
Sa	ga/n(o)	ga>no	ga>no	no>ga	ga/no	n(o)>ga
Sp	ga/n(o)	ga>no	ga>no	no>ga	no>ga	no>ga

C 類従属節の場合、全ての階層でノが容認される結果となった。カラ、ケレドのどちらの従属節でも、親族、固有名詞・他動詞文という最もノが容認されにくい階層でノが現れることができた(56)(57)。

(56) C 類 (カラ) 親族名詞・他動詞

<i>otooto{ga/n}</i>	<i>madoba</i>	<i>wattaken,</i>
<i>otooto={ga/no}</i>	<i>mado=ba</i>	<i>war-ta=ken</i>
弟=NOM	窓=ACC	割る-PST=CSL

<i>okaasanni</i>	<i>ogorareta.</i>
<i>okaasann=ni</i>	<i>ogor-rare-ta</i>
お母さん=DAT	怒る-PASS-PST

「弟が窓を割ったから、お母さんに怒られた。」

(57) C 類 (ケレド) 親族名詞・他動詞

<i>otooto{ga/n}</i>	<i>madoba</i>	<i>wattabatten,</i>
<i>otooto={ga/no}</i>	<i>mado=ba</i>	<i>war-ta=batten</i>
弟=NOM	窓=ACC	割る-PST=ADVRS

<i>ogoranzyatta.</i>
<i>ogor-a-n=zyar-ta</i>
怒る-THM-NEG=COP-PST

「弟が窓を割ったけれど、怒らなかった。」

例文(56)、(57)は、最も動作主性が高いが、人間普通名詞よりもノの選好性が高くなっています、動作主性に応じた分布から外れている。また、人間普通名詞や無生物名詞で、動作主性に応じた分布から外れるものが見られる。最も動作主性の低い無生物名詞でも、ガの方が選

好性が高くなっている、主節やB類従属節と比べても、動作主性に応じた分布から外れるものが多い。

次に、B氏の結果を示す。

表 18 C類(カラ) B氏

C類 カラ	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga>no	ga>no	ga>no	ga/no	ga>no	ga>no
Sa	no>ga	no>ga	ga/no	no>ga	ga/no	no>ga
Sp	no>ga	no>ga	ga>no	ga/no	ga/no	ga/no

表 19 C類(ケレド) B氏

C類 ケレド	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga>no	ga>no	ga/no	ga/no	ga/no	ga>no
Sa	ga>no	ga>no	ga/no	no>ga	ga/no	ga/no
Sp	ga>no	ga>no	ga>no	ga/no	no>ga	ga/no

先ほどの話者と同様に、全ての階層でノが容認される結果となった。主節やB類従属節と比べて、ノの容認範囲が広がっている。

また、B氏の調査結果でも、動作主性に応じた分布から外れる例が多く見られる。カラを用いた従属節の意志自動詞文では、ガとノの選好性が動作主性に沿っていない。親族・固有名詞ではノが選好され、人間普通名詞や動物名詞では、ガもノも選好性に違いはないという結果になっている。ケレドを用いた従属節でも、無生物名詞でガの選好性が高くなっている。A氏と同様に、動作主性に応じた分布から外れるものがこれまでの節より多く見られる。

次に、C氏の結果を示す。

表 20 C 類 (カラ) C 氏

C 類 カラ	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga	ga	ga>no	ga>no	ga	ga>no
Sa	ga/?no	ga	ga>no	ga>no	ga/no	n(o)>ga
Sp	ga>no	ga	ga>no	ga>no	ga	ga>no

表 21 C 類 (ケレド) C 氏

C 類 ケレド	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga>no	ga>no	ga/?no	ga>no	ga>no	ga>no
Sa	ga>no	ga>no	ga	ga/no	ga>no	n(o)>ga
Sp	ga>no	ga>no	ga	ga/no	ga>no	ga>no

C 類の従属句を用いた節内では、階層上の位置によっては、ノが容認されない名詞があるものの、ノの容認範囲は広がっていた。例えば、親族名詞では、カラ節ではノが容認されないままであるが(58)、ケレド節では、ノが容認できている(59)。

(58) C 類 (カラ) 親族名詞・他動詞

otooto{ga/*no}	madoba	wattaken,
otooto={ga/*no}	mado=ba	war-ta=ken
弟=NOM	窓=ACC	割る-PST=CSL

okkanni	ogorareta.
okkan=ni	ogor-rare-ta
お母さん=DAT	怒る-PASS-PST

「弟が窓を割ったから、お母さんに怒られた。」

(59)	C 類 (ケレド)	親族名詞・他動詞
	<i>otooto{ga/no}</i>	<i>madoba</i>
	<i>otooto={ga/no}</i>	<i>mado=ba</i>
	弟=NOM	窓=ACC

wattabatten,

war-ta=batten

割る-PST=ADVRS

ogorarenzyatta.

ogor-rare-n=zyar-ta

怒る-PASS-NEG=COP-PST

「弟が窓を割ったけれど、怒られなかった。」

また、他の話者二人と同様、C 類従属節では、動作主性に応じたガとノの分布から外れるものが多かった。固有名詞では、ノが容認不可であるとの回答だったが、親族名詞では容認されており、分布から外れている。また、動作主性の低い動物名詞でもノが容認されないものがある。ケレドを用いた従属節においても、親族名詞や固有名詞では容認できていたノが人間普通名詞では容認されなくなっている。動物名詞や無生物名詞でも動作主性に沿わないものが見られ、分布から外れるものが多い。

C 類従属節では、全ての話者に共通してノの容認できる範囲が広いということがわかった。他の節と比較しても、最も広い領域でノが容認されていた。

また、C 類従属節では、クロス階層に沿わない結果が多く見られた。C 氏のケレド節では、三分の一が分布から外れた結果となっており、他と比較すると、動作主性を反映したものと言い難い。

4.5. D 類の調査結果

D 類の調査結果は以下の通りである。D 類では、トとトイウのみ例として挙げられていたため、それら二つを用いて例文を作成した。しかし、調査の際、例文(60)のような回答となり、南島原市方言において「トイウ」にあたる語句が用いられなかったため、トのみの結果を示す。

(60) a. 弟が倒れたげなとん、ほんとかにや。

b. 弟が倒れたてほんなこんな？

「弟が倒れたっていう話、本当？」

まず A 氏の結果を示す。

表 22 D 類 (ト) A 氏

D 類 ト	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga	ga/?no	ga/?no	no>ga	no>ga	no>ga
Sa	ga/?no	ga	ga>no	no>ga	no>ga	n(o)>ga
Sp	ga>no	ga>no	ga/no	ga/no	no>ga	no>ga

先ほどの C 類とは異なり、一部ノが容認不可という回答があったが、主節や B 類と比較すると、ノの容認可能範囲は広い。

動作主性に応じた分布から外れるものとして例文(61)がある。動作主性の高い固有名詞・意志自動詞文でノが容認されず、それより動作主性の高い他動詞主語の場合には、ノが容認された。

(61) D 類 (ト) 固有名詞・意志自動詞

Taroo{ga/*no}	sakini	kaettate	iwasita.
Taroo={ga/*no}	sakini	kaer-ta=te	iw-rass-ta
太郎=NOM	先=DAT	帰る-PST=QUOT	言う-RSP-PST
「太郎が先に帰ったと言った。」			

次に、B 氏の結果を示す。

表 23 D 類 (ト) B 氏

D 類 ト	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga>no	ga>no	ga>no	ga>no	ga>no	ga>no
Sa	ga>no	ga>no	ga>no	ga>no	ga>no	ga/no
Sp	ga>no	ga>no	ga>no	ga/no	ga>no	no>ga

C 類従属節と同様に階層上の全ての名詞でノが容認されたが、動作主性や他動性による容認度の違いがあまり見られなかった。主節や B 類従属節の場合の分布と比べると、ノの容認範囲は広い。

また、動物名詞・非意志自動詞文で、動作主性に応じた分布から外れる結果が見られた。

次に、C 氏の結果を示す。

表 24 D 類 (ト) C 氏

D 類 ト	名詞					
	親族	固有	人間普通	人間普通	動物	無生物
			非尊敬	尊敬		
A	ga	ga	ga	ga>no	ga>no	ga>no
Sa	ga	ga	ga	ga>no	ga/no	no>ga
Sp	ga>no	ga>no	ga	ga>no	ga	ga>no

動作主性が高い親族名詞、固有名詞では、他動性の低い非意志自動詞の際に、ノも容認された(62)。これらは、主節ではノが容認されなかったものであり、ノの容認される領域が広がっている。人間普通名詞階層でも、ノの広がりが見られる。

(62) D 類 (ト) 親族名詞・非意志自動詞

otooto{ga/no}	uttaoretabaite
otooto={ga/no}	uti-taore-ta=bai=te
弟=NOM	PFX-倒れる-PST=SFP=QUOT

senseino	iwasita.
sensei=no	iw-rass-ta
先生=NOM	言う-RSP-PST

「弟が倒れたと先生が言った。」

一方で、人間普通名詞（非尊敬）、動物名詞では、他動性が低いにも関わらず非意志自動詞文でノが許容されていない。このような動作主性に応じた分布から外れているものが低動作主階層で見られる。

D 類従属節も、主節よりもノの容認範囲が広がっていた。C 類従属節と比べると同等、あるいは少し狭い領域でノが許容された。

また、動作主性に応じた分布から外れるものも少なく、動作主性を反映しているといえる。

4.6. ノの領域の変化

ノの領域の広がりの変化を数値で表したものが表 25 である。一つの節につき 18 例文の調査を行い、それらのうちガしか容認されなかつたもの、ノも容認できたものがそれぞれいくつであったか数えた。

表 25 節タイプ別結果

		A 氏		B 氏		C 氏	
		ガのみ	ノも可	ガのみ	ノも可	ガのみ	ノも可
主節		7	11	10	8	12	6
連体節		7	11	0	18	11	7
B 類	タラ	7	11	2	16	9	9
	テモ	4	14	4	14	11	7
C 類	カラ	0	18	0	18	6	12
	ケレド	0	18	0	18	2	16
D 類	ト	2	16	0	18	8	10

いずれの話者でも、ノが容認可能となった範囲が最も広かつたのは、C 類であった。C 類に次いで広くなったのは、D 類である。また、主節が最もノが容認される範囲が狭いという結果も共通して見られた。B 類と連体節は、話者によってばらつきがあったが、主節よりも広い傾向があった。

5. 結論

本研究では、これまで調査対象となることが少なかつた従属節、特に副詞節内のガとノの分布を明らかにすることができた。まず主節と比較すると、副詞節の方が、ノが容認されやすい傾向にあることがわかつた。副詞節の中でも、ノの容認される範囲の広さには差があり、特に C 類と D 類でノの領域が広がる結果となつた。このことから、従属節のタイプがガとノの容認度や選好性に影響すると考えられる。

また、従属節では、主語が中立叙述解釈となるため、動詞や名詞の種類に関わらずノが容認されるようになると Saruwatari (2016) は主張していたが、動詞や名詞の種類によってガとノの容認度や選好性に差が見られた。このことから、従属節内でも他動性や動作主性に応じたガとノの分布がベースとしてあり、節が変わることでノの領域に変化が生じるといえる。しかし、C 類従属節においては、動作主に応じた分布から外れるものが多く見られた。そのため、C 類従属節では、動作主性よりも別の要因が強く働いている可能性があるといえる。

また、標準語と同様に、連体節内の方が主節よりもノが容認されやすくなる傾向があるこ

とがわかった。連体節内でも、主節や C 類以外の副詞節と同様に動作主性に応じたガとノの分布がベースとしてあることがわかった。

6. おわりに

今回の調査では、C 類従属節では、動作主性以外の要因が強く働いている可能性を示唆したが、その要因を明らかにすることはできなかった。この点について、より詳細な調査、分析を今後も行う必要がある。従属節内で中立叙述解釈になるという点を考慮し、焦点とも関連付けた再検討を今後の課題とする。

また、主節、連体節、B 類従属節に関しては、ノの領域の広さにあまり差がない話者が見られたため、より差が見えやすいような工夫が必要である。今回は、例文を提示し、それを話者に方言で話してもらうという形式で調査を行ったが、こちらがあらかじめ南島原市方言に訳したものを持ち出し、ガとノの容認度をそれぞれ五段階で評価してもらうという形式での調査もしていきたい。

参照文献

- 秋山正次・吉岡泰夫 (1991) 『暮らしに生きる熊本の方言』熊本：熊本日日新聞社.
- 藤原与一 (1991) 『九州西側〈筑前・肥後〉三要地方言一福岡県桜井方言・熊本県白水村方言・熊本県天草大江方言一』東京：三弥井書店.
- 加藤幸子 (2005) 「熊本方言における「が」と「の」の使い分けについて」『言語科学論集』9: 25-36.
- 古瀬順一 (1969) 「島原半島の助詞（その1）」『愛知教育大学研究報告（人文科学編）』18:1-17.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』東京：大修館書店.
- 南不二男 (1993) 『現代日本語の輪郭』東京：大修館書店.
- 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書1「は」と「が」』東京：くろしお出版.
- 坂井美日 (2013) 「現代熊本市方言の主語標示」『阪大社会言語学研究ノート』11: 66-83.
- 坂井美日 (2018) 「九州方言における主語標示の使い分けと動作主性」日本言語学会第156回大会口頭発表. 東京大学 2018年6月23日.
- Saruwatari, Asuka (2016) “Nominative and Genitive Cases in Japanese : From Dialectical and Cross-Linguistic Perspectives,” Ph.D. dissertation. 大阪大学
- 猿渡翠加 (2019) 「長崎方言における属格主語」『大阪工業大学紀要』64(2):53-63.
- 田窪行則 (2010) 『日本語の構造 推論と知識管理』東京：くろしお出版.
- 吉村紀子 (2006) 「熊本八代方言から日本語を見る一主格の「が」・「の」をめぐって一」『Scientific approaches to language 5』195-221.

グロス一覧

ACC	accusative	対格
ADVRS	adversative	逆接
CND	conditional	条件、仮定
CONC	concessive	逆接（確定条件）
COP	copula	コピュラ
CSL	causal	順接（確定条件）
DAT	dative	与格
HOR	hortative	勧誘
INF	inferential	推量
NEG	negation	否定
NOM	nominative	主格
NPST	non-past	非過去
OBL	obligative	義務
PART	particle	助詞
PASS	passive	受動
PF	perfect	パーフェクト
PFX	prefix	接頭辞
PST	past	過去
QUOT	quotative	引用
RSP	respect	尊敬
SEQ	sequential	継起
SFP	sentence final particle	終助詞
THM	thematic vowel	語幹拡張母音
TOP	topic	主題
-	affix boundary	接辞境界
=	clitic boundary	接語境界
*		話者が容認できない表現
?		話者自身は使用しないが、容認できる表現

謝辞

この論文の完成にあたり、多くの方々からのご支援と助言をいただきました。まず初めに、指導教員である下地先生に深く感謝いたします。下地先生には、本論文の調査、執筆に際し、熱心に指導していただきました。同研究室の院生である松岡さん、宮岡さん、廣澤さんにも、たびたび助言していただき心から感謝いたします。また、研究の進行や論文の執筆において多大な助力をいただいた同期の皆様にも心から感謝申し上げます。共に知識を深め、アイデアを交換する中で、より良い研究ができたことを誇りに思います。また、貴重な時間を割いて本研究の調査に協力してくださった話者の方々にも深くお礼申し上げます。最後に、私の家族や友人に感謝の意を表します。彼らの絶え間ないサポートと励ましのおかげで、この論文を完成させることができました。心からの感謝をこめて謝辞とさせていただきます。